

400号誌
記念誌

令和4年11月1日発行（毎月1日発行）

2022.11
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とよ や
富 薬

11号

第44巻
No.400



ビワ *Eriobotrya japonica* Lindle (バラ科 *Rosaceae*)

生薬 ビワヨウ（枇杷葉） 秋に葉を採取し、裏面の毛をブラシなどで取り除いた後陽乾する。

成分 青酸配糖体：amygdalin、セスキテルペン：nerolidol, eriojaposide A, B、トリテルペノイド：ursolic acid, oleic acid, euscaphic acid, maslinic acid、ポリフェノール：chlorogenic acid, procyanidin、糖類等。

効能 口渇、健胃、止渴、鎮咳、消炎、利尿薬として甘露飲や辛夷清肺湯、枇杷葉湯に配合される。民間では咳止め暑気あたり胃腸病に煎じて服用する。あせも、湿疹、皮膚炎に浴湯料として用いる。

生薬 ビワヨウ（枇杷葉）

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



常緑広葉の小高木で、高さは5-10mになります。若枝は、淡褐色の細かい毛に覆われています。葉は互生し、葉柄は短く、広倒披針形、狭倒卵形で葉身は厚くて堅く、表面が凸凹しており葉脈ごとに波打ち、葉縁には波状の鋸歯があります。葉の裏面は淡褐色の綿毛に覆われています。晩秋から冬(11-1月)にかけ円錐花序をつけ、甘い芳香がある地味な白い5弁花を咲かせます。長い花期は交配に関与する昆虫などが少ない時期でも交配を助けるため、また多量の花蜜を蓄え、甘い芳香を放つことは少ない昆虫を誘うためと考えられています。果実は他の果物よりもいち早く初夏(5-6月)に黄橙色に熟します。果実は直径3-5cmの球形から卵形、広楕円形で、軟毛に覆われています。果実の中には大きな赤褐色の種子が数個あり、多くの部分を占め、可食できる甘い果肉部分は全体の約3割ほどです。年平均気温が15℃以上の地域で、受精後の幼果は低温に弱く-3℃以下で寒害を受けるため現在長崎県や千葉県など温暖な地域を中心に栽培が行われています。最近では温暖化のためか北陸でも栽培が可能になっています。

中国南西部原産と言われ、『史記』(BC92-89)の「司馬相如(BC179-117)列伝」に「盧橘は夏に熟し、黄柑・橙・枇杷・柿…」と果樹の一つとしての記載があります。『本草衍義』(1119)には「その葉の形が琵琶に似ているから名けたものだ」と楽器の琵琶が語源とっています。

我が国においては山口県から福井県、その沖合の島々に野生品が自生していることから日本も原産地の一つと考えられてきました。しかし、弥生時代中期(BC2C)以前の遺跡から種子の出土がないことや、『本草和名』(918)に「枇杷葉、和名比波」とあり、中国名「枇杷」の音読みであることなどから、中国から日本に渡来し、各地で野生化したものと考えられています。一説には中国南部から海流に乗り、日本海側の島々に流れ着いたものが繁殖したともいわれています。

果実としての記録は奈良時代の『正倉院文書』(764)の「宝亀二年(716)五月二十九日」に「一百文枇杷四斗直(斗別廿五文)」とあり、果実が売られていたことから供え物とされたことが分かります。栽培の記載は江戸初期の『農業全書』(1697)に「枇杷は諸葉に先立ちて熟しめづらし。土地のきらひもさまではなし。…又大きは雉の卵のごとく、核子なき物唐にはありとみえたり」とあり、種なしビワに触れていますが、国内で実際に種なしビワが品種登録されたのは2006年で「希房」と名付けられました。現在のビワは天保・弘化年間(1830-1848)に中国南部から長崎に伝えられた大果種を長崎市茂木町で蒔いたものから大果品種「茂木」が、明治12年(1879)に東京で同じく大果種から育成された「田中」などが主流で栽培されるようになり、果樹としての地位を築いてきました。

薬としての「枇杷葉」の利用は『名医別録』(502-536)に「枇杷葉、味苦、平、毒無し。卒唳(急にむせぶ)止まず、気を下すのを主る」とあり、『本草綱目』(1578)には「胃を和し、気を下し、熱を清し、暑毒を解し、脚気を療ず」と述べられています。わが国で用いられるようになったのは江戸後期からと言われています。薬剤を剤形別に詳細を記した『丸散手引草』(1769)に「枇杷葉湯(和剤)食傷腹痛み不食、酒の二日酔エづき等に用ゆ。重き食傷には吐するか瀉すべし。此薬吐すべきは吐し、瀉すべきは瀉せしむるの功あり。夏月暑中り或いは冷物を食し、葉等の中脘に停滞するの證に用ゆ」とあります。江戸から明治にかけての地誌『武江年表』に「天明(1781-1789)の始より京烏丸、枇杷葉湯歩行」とあり、京都烏丸の薬店から始まったとされる「枇杷葉湯売り」の行商が行われていたようです。(村上守一 記)